

目的 履き心地の良い婦人靴について追究するための基礎試料を得るため、現在女子学生が所持使用している靴について調査を行った。

方法 調査の対象は、18～21歳の女子学生で総数1103名である。調査の方法はアンケート方式で、設問10項目について回答をしてもらった（複数回答もあり）。調査の実施は1984年6月～7月である。

結果 1)女子学生個人の所持する靴は、7～12足が最も多く58.3%であり、サンダル（1094人）スニーカー（1010人）パンプス（1050人）である。2)靴のサイズは60.3%の者が23～23.5cmである。3)靴の利用度はスニーカー81.3%、パンプス83.6%、ウエッジ58.8%であつた。4)利用度の多いヒール高は1.0cmで、かなり低いヒールが好んで履かれている。5)新規購入は季節で異なり、1足は必ず購入する者が、春51.6%、冬48.1%、秋38%、夏35.7%であり、夏は2足（主にサンダル）購入する者が45.2%であつた。6)新規購入時、ヒール高により靴のサイズを変える者が約20%あつた。7)靴購入時の留意点はデザインが第1位で、機能性はあまり期待していない。しかし、機能性としての項目には、耐久性、柔軟性、通気性等をあげており、これらが履心地を左右するとしている。8)雨天専用の靴の利用は少い。9)靴の手入で洗浄する者は52.8%でスニーカーが最も多い。10)靴による障害は、圧迫によるタコや変形で第5趾、踵部、第1中足骨部位に多くみられた。以上のことから、履心地の良い靴は、ヒールの高低、耐久性、柔軟性、通気性等が主たる要因であり、局部的な圧迫により障害を起こさないものであることを認めた。